

## 第2部

### 2030年のふくい物語

## 第2部 2030年のふくい物語

この第2部では、前報告書で描いた社会の姿と第1部で考察した2030年の福井の暮らしを、より分かりやすく世代に分けて描きます。

また、人々の暮らしぶりや課題は、年齢により異なることから、年齢を区分して描いていきます。この年齢の区分は、本報告書のP110のとおり、共通の価値観を有する「世代」で区分しており、世代ごとに、どのような希望を持ち、活躍しているのかを考えました。

さらに、社会の変化に伴い、福井人気質の殻を破り、一人ひとりの気概と行動により、社会をよりよいものへと変化させていくという想いを込めました。

2030年の福井のみなさんが希望を持って、この豊かな福井で暮らすためにも、これからその準備を進めていく必要があります。次に私たちが描いた2030年の福井の暮らしを参考にいただき、一人ひとりが2030年の自分の世代、その時の家族、地域を想像しながら、今から何をすべきか、どのような行動をすればよいのかを思い描けるようにまとめました。

## 第1章 2030年の世代の姿

### ＜世代－対立から継承・共生へ＞

スペインの社会学者オルテガは著書「危機の本質－ガリレイをめぐる」の中で、「世代は歴史を区分する上できわめて重要な概念であり、同年代の人々が同じ経験をすることで形成される。多くの場合はそれと対抗する形で次の世代が形成され、両者は交替するのではなく、同時に同じ歴史的事実に参与し、しのぎを削りながら時代をつくる。同一の出来事でも、それが二つの異なった世代の上で起こると、まったく異なった歴史的事実となる。」とし、さらに一生を15年間ずつの5つの世代「少年期」、「青年期」、「導入期」、「壮年期」、「老年期」に分けています。(ただし、オルテガの時代と比べ現代では平均寿命が延びていることに留意が必要です。)

また、ドイツの社会学者カール・マンハイムも著書「世代の問題」の中で、同時代に生まれた諸個人がその人間形成期である思春期に、その時代の特徴をなすような社会的・精神的な思潮に参加することなどを通じ、一つの世代として連結されるとする「世代論」を展開しています。

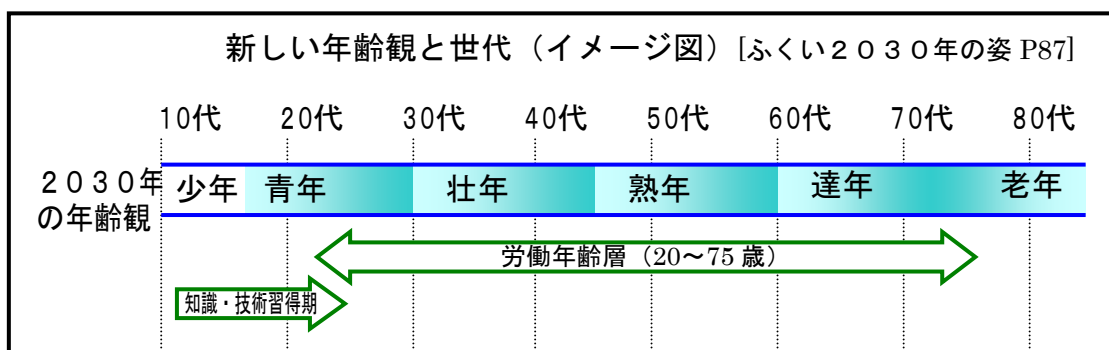
一方、日本においては、団塊の世代、新人類世代、団塊ジュニア世代など世代ごとに様々な名前が付けられ世代論が展開されていますが、各種の意識調査などを見てみると、どのような時代に自己形成をしたかにより意識や行動に明らかな違いが生じています。また、NHK放送文化研究所が実施している「日本人の意識調査」の分析結果からは、一つの世代の若い頃（青少年期）に形成された考え方は、年を重ねてもあまり変化しないことが読み取れます。

このため、世代による意識の変化を見ることを通じて、現代社会の特性をより重層的に捉えることができます。また、次の世代の意識と行動、さらには働き方や家族のあり方など、新たな視点から、よりわかりやすく描くことができると考えられます。

また、従来、「いまどきの若者は・・・」に代表される世代ごとの価値観・文化の違いや年金・医療・雇用の問題など、世代は「対立」を軸として語られることが多く見られます。

しかし、少子高齢化の急速な進展による人口、労働力の減少や、晩婚化の影響による家族のライフサイクル・役割分担の変化など、2030年に向けて、世代間の関わり方が大きく変容し、世代間の問題は「対立」から「継承」、「共生」に変わらなければならぬと考えられます。

こうしたことから、前報告書で示した新しい年齢観を踏まえ、「子ども世代」、「青年世代」、「壮年世代」、「熟年世代」、「達年世代」、「老年世代」の6世代に区分し、各世代の2030年の姿と世代間の関わり方を検討することとしました。これは、オルテガの示した5つの世代に60～75才の達年を加えたものです。



2030年の6つの世代

名称	2009年の年齢	2030年の年齢		2030年の世代
—	—	0歳～16歳	2014年～2030年生	子ども世代
—	～10歳	17歳～31歳	1999年～2013年生	青年世代
新人類ジュニア	11歳～25歳	32歳～46歳	1984年～1998年生	壮年世代
団塊ジュニア	26歳～40歳	47歳～61歳	1969年～1983年生	熟年世代
新人類	41歳～55歳	62歳～76歳	1954年～1968年生	達年世代
団塊世代	56歳～65歳	77歳～86歳(以上)	1944年～1953年生	老年世代

出典：「ふくい2030年の姿」検討会作成

## 1 子ども世代（15歳）

子ども世代：2030年の年齢 0～16歳  
（2014年～2030年生）

（2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
希望をはぐくむ心	→	地域の希望の醸成
自立する心	→	選べる教育
周囲のサポートに感謝する心	→	つながりの循環

### <7歳まで：就学前>

福井では、子どもを産み育てることは楽しく素晴らしいことだという意識が広がり、少子化にある程度歯止めがかかって、3人っ子も増えています。妊婦健診や周産期医療の整備等により、赤ちゃんが元気に生まれ育っています。

育児休暇の取得やワークライフバランスの働き方が一般的になり、乳幼児は、父母のどちらかが休みを取って育てられています。子どもは地域や日本、世界の宝だという意識が浸透し、育児休暇をとることは仕事に勝るとも劣らず大事なことだと考えられています。

父母がともに働きに出る場合は、待機者ゼロの子ども園に預けられます。子ども園は、保育園と幼稚園が一元化されたもので、「福井六育」の仕組みはここでも取り入れられています。就学前の早期から六育が進められるので、子どもたちは家庭環境に関係なく、知・体・徳・才・夢・健全な食生活をはぐくむことができます。

子ども園では、子どもたちは、楽しく遊ぶなかで、仲間を想い、いろんなことに興味を広げ、学びを深めています。子ども園の先生たちも、乳幼児に適した六育の進め方について様々な工夫を凝らし、先生同士の勉強会も盛んです。

子ども園では、父母が迎えに来るまで預けられますが、三世代同居・近居が他府県と比較してある程度残っているため、祖父母が早めに子どもを迎えに来て、家で子どもの面倒を見てくれることも多くあります。

また、地域での助け合いが発達しているため、公園などでの養育・教育も盛んです。子どもたちは自分の祖父母の住む家やその近所などで、遊び、育っています。こうした、世代間交流・地域内交流も子どもの成長にプラスに働いています。

近所の公園に行くと、いろんな年代の子どもが遊んでいて、また、時々、ボランティアの大人や大学生が遊びに加わってくれます。ままごとをする子、鬼ごっこに興じる子、ヨーヨーやこま回しを近所のおじいちゃんに習っている子もいます。公園内の畑では、近所のおばあちゃんが野菜作りをしていて、子どもたちも一緒に手伝っているような風景も見られます。

このように、「福井六育」や家庭・地域での養育・教育により、福井の子どもたちは、発達に必要な経験を楽しみながら積むことができ、戸惑うことなく小学生に進むことができるようになっていきます。

### < 7歳以降：就学後 >

現在、福井の子どもたちは、少子化により、学校での少人数教育や本物に触れる機会の増加など、以前に比べ充実した学校教育を受けられる環境にあります。しかし、子どもたちの数が減少している中で、子どもたち同士の交友から学ぶ機会は減っているといえます。

2030年には、現在の福井県の高い教育の質がさらに向上しています。子どもたちも、**自立して学ぶ姿勢**を身に付けています。学校もそれぞれの子どもに合った学習が選べる環境に変化しています。勉強を教える場であることに加え、子どもたちが勉強する素材を提供する場にもなり、少人数教育やICTを使った教育が充実しています。

また、希望をはぐくむ教育「希望の輪」の考え方が教育分野にも導入されることで、子どもたちは、幅広い事象に関心を持ち、自分の希望に対して努力し、可能性を広げるようになっていきます。さらに、周りの仲間の希望にも関心を持ち、「自分たちの希望」をはぐくむことも大事にしています。

子どもたちが自立して学ぼうとする姿は、大人たちにも伝わります。2030年の福井では、教育が広く地域社会に開かれたオープン・システムとなり、大人も子育てをしながら学ぶことができる「社会総ぐるみ」の人育ての環境になっています。誰もが先生であり、生徒であるといった共に学びあう関係が希望を共有し、子どもと大人のそれぞれを成長させる関係になっています。

子どもたちも地域の人と交流して学ぶことで、共感能力を高め、自分の成長のために周囲がサポートしてくれているという**感謝の気持ち**を持っています。他世代の福井人との交流は、年上・年下のそれぞれを思いやる心を育てることになります。こうした経験を通して、福井では地域の小さな子もサポートするつながりの好循環をつくり出していきます。

## 2 青年世代（30歳）

青年世代：2030年の年齢 17歳～31歳  
 （1999年～2013年生）  
 2009年現在の年齢：～10歳

（2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
仕事の質を高める心	→	生産性・創造性の高まり
ワークライフバランスを意識する心	→	職場から地域への回帰
人と交流する心	→	交流人口の増加

これまで、青年世代は、学校を卒業すると企業等で働き、仕事を通じて能力開発を行ってきました。今後、人口が減少する中、豊かな社会を維持し、さらに発展させるためには、一人ひとりの能力を最大限に発揮することが重要になってきます。

国境を越えて社会が融合していく中で、現在の青年世代よりもさらに外に向けての広い視野を持たなければなりません。そこで、グローバル市場での実務経験や大学院での専門分野の研修など、世界でも通用する能力を身に付けようとしています。

グローバル市場に目を向ける一方で、自分たちの生活する地域・ふるさとをよくしたいという意識（希望）も強くなってきます。グローバルとローカルを同時に大事にする「グローバルな心」が育ち、今以上に「都会」でなく「地方」で生活し、活躍したいという人が増えています。こうした「グローバルな心」は、社会貢献を基本として活動を行う社会的企業を通して生まれ、地域社会の問題をどう解決するかを考える人が多くなっています。

また、業種、職種にとらわれず、現在の自分の仕事に誇りを持ち、自ら挑戦し、生産性や創造性を高めるなど、**仕事の質**を重視するようになっていきます。青年時の徹底した職業人意識の向上は、福井発の人材養成プログラムとして世界からも注目されるようになります。

青年世代は、学生から社会人へ、また、単身から結婚へと、自分の生活環境が大きく変化し広がりが増す時期にさしかかります。限られた時間の中で、最適なワークスタイルを意識して、**ワークライフバランス**を積極的に取るようになり、社会全体がゆとりのある生活に変化するきっかけになります。

さらに、2030年の青年世代は、幼少の頃から、バーチャルゲームやインターネットが身近にある環境で育った世代です。このため、デジタル社会でのマナーを身に付け、仮想の世界は仮想の世界と認識しながらも、仮想の世界を生活の一部として楽しむことができます。現実の社会ではもちろん仮想の社会でも誠実な人柄により、信頼できる友人として福井人を中心とした**人の輪（ストロングタイズ&ウィークタイズ）**ができるようになっていきます。

### 3 壮年世代（45歳）

壮年世代：2030年の年齢 32歳～46歳

世代：新人類ジュニア（1984年～1998年生）

2009年現在の年齢：11歳～25歳

#### <青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・日本の高度成長やバブル経済を知らず、安定した経済成長の中で成長。普通の先進国となった日本しか知らない
- ・ゆとり教育を受け、男女混合名簿で育ち、協調性が高い
- ・パソコン、携帯電話が普及し、コミュニケーションの主な手段は携帯電話、メールとなる
- ・新興大国（BRICs）の台頭など、世界的な競争が激化する中で、世界における日本のプレゼンスが低下
- ・子どもの頃から環境問題を学び、地球温暖化やエネルギー問題などの地球レベルの課題を理解し行動している

#### （2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
生活を楽しむ心	→	みんなでの支え合い
分け合う心	→	豊かさの共有
統合・調和する心	→	現在と未来のバランス

現在の壮年世代の日常生活は、労働が主となった生活になっています。しかし、家庭生活や地域活動など、この世代の福井人が周囲から期待される分野は、労働以外にも多様です。さらに余暇活動や教養の再蓄積など、自らが求める分野も多方面に渡っています。

2030年の社会は、ともに分かち合う社会です。特に、子育てや介護などを他の世代とともに支え合うことで、この世代が生活を楽しむことができるようになります。

また、この世代の福井人は、自己所有・自己消費を楽しむという考え方から、社会企業家として、社会貢献しながらビジネスを行うなど、自分の能力や関心も「分け合う」という考え方を持つようになります。カーシェアリングなどの物の分け合い、仕事の分担などの時間の分け合い、二地域居住などの居住地の分け合い、祖父母や地域での子育ての協力などの精神的な分け合いなど、この世代が直面する課題をみんなで分け合うことで、問題を抱え込まず余裕のある生活の豊かさを共有することが可能になっています。



さらに、希望を少しずつ実現していくとともに、他の世代と希望を分け合い、新しい希望を見出していくという役割も期待されます。

この世代の福井人には、「統合・調和」する役割が期待されます。子ども世代・青年世代と熟年世代・達年世代間の橋渡し役や、仕事の面でも、専門分野を結合して、総合的に物事を判断できる能力を身に付け、新たなものを創造する役割を果たします。世代の中間に位置することで、現在と未来の課題について、バランスを持って判断する能力が求められる世代でもあり、福井人はそうした社会のニーズに応えようと努力します。

また、男女混合名簿で育ち、男女の差を全く意識しない世代です。また、子どもの頃からインターネットや携帯電話を使い、バーチャルな世界をもう一つの空間として使いこなす世代です。



ニンテンドーDS（2004年）



【ICT】携帯電話（2008年）



【地球環境問題】クヌギやコナラなどの苗を植樹する子どもたち（2008年）

## 4 熟年世代（60歳）

熟年世代：2030年の年齢 47歳～61歳  
 世代：団塊ジュニア（1969年～1983年生）  
 2009年現在の年齢：26歳～40歳

### <青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・バブル経済の崩壊により、青年期に就職氷河期を経験しロスジェネレーションと呼ばれる（フリーターやニートの増加）
- ・ベルリンの壁崩壊、ソビエト連邦崩壊後、金融、物流、経済面でのグローバル化が進み、国際的な相互依存関係を実生活でも実感
- ・ナホトカ号重油流出事故や福井豪雨が起こり、安全を強く意識するとともに、ボランティアなどの社会貢献の意識も高い
- ・小学生で自室とテレビを持つようになり、家庭内のシングル化が進行
- ・子どもの頃から、テレビゲーム、パソコンが普及し、多様なメディアにも対応
- ・男女雇用機会均等法施行後に就職し、男女平等に対する意識が進展
- ・親子とも戦争を知らない世代

### （2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
成熟した心	→	能力の社会への還元
進化・挑戦する心	→	年齢を問わないチャレンジ
支援・サポートする心	→	世代間のセーフティネット

現在、一般的な企業では65歳まで働きます。定年後の人生はセカンドライフともいわれ、それまでに培われた知識や経験を活かして、新たな分野で活躍することが期待されます。しかし、個人や社会からも知識や経験の活用ニーズは高いものの、実際の参加については難しい面もあります。

しかし、2030年には、熟年世代の福井人の成熟した心と豊富な知識・技能は、長年の経験と実績に裏付けされた確かなものとして、今まで以上に社会から必要とされています。「右肩上がりの成長」から「成熟」へと社会の趨勢が変わっていく中で、真の豊かさを見極め、自らの能力を社会に還元しようとする**成熟**した心が大事になります。

また、これまでの経験が社会でどのように活かすことができるかを考えたり、技術をさらに磨くなど、自分を時代に合わせて**進化**させています。さらに、時代に合わせるだけでなく、新たな分野に**挑戦**するなど、経験に基づくパイオニアとしての行動を起こしています。

さらに、この世代の福井人は、若い世代を育てる役割を担うとともに、自らも他の世代から新たな刺激を受け、他の世代の考え方や文化を積極的に取り入れます。この世代が社会のアドバイザーとして他の世代の福井人を**支援・サポート**しています。



福井豪雨でのボランティア活動（2005年）



パソコンの画面を見ながら自分の能力に応じた学習を進める生徒（武生東高校）（1989年）



【国際交流】今立町（現越前市）のパピルス館で紙すきを体験し出来具合を見せ合う生徒たち（1990年）



【就職氷河期】厳しい就職環境（2003年）



ファミリーコンピュータ（1983年）

## 5 達年・老年世代（75歳）

達年世代：2030年の年齢 62～76歳  
世代：新人類（1954年～68年生）  
2009年現在の年齢：41～55歳

### <青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・小学生時代から自宅にテレビ、マイカーがある世代で、特にテレビとともに育った最初の世代
- ・高度経済成長を経て経済大国日本となる中で成長し、仕事と余暇の両立志向が強い
- ・進学率が高まり高校・大学を受験する者が増加し、受験戦争を体験（高校進学率92%、大学・短大進学率38%）
- ・ロック音楽や漫画、アニメ等のサブカルチャーを生み出し、新たな価値観を創造
- ・男女雇用機会均等法が施行され、男女平等の意識が社会的に浸透



充実する高校教育（1976年）



ウォータージェット織機の導入を中心に近代化された織物工場（1984年）



あすを担う子どもたち（プレハブ教室で授業も）  
（1976年）



初代ウォークマン（1979年）

老年世代：2030年の年齢 77～86歳（以上）

世代：団塊世代（1944年（以前）～53年生）

2009年現在の年齢：56歳～65歳（以上）

<青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・ 傷痍（しょうい）軍人や尋ね人のラジオ放送など、戦争後の姿を見て成長
- ・ 旧正月など、戦前の風習も体験
- ・ 経済成長過程で育ち、高度経済成長後期の担い手であり、右肩上がりの社会を体験
- ・ 四日市ぜんそく、イタイイタイ病などの公害が発生し、経済の発展と環境災害の両方を体験
- ・ 安保闘争、全共闘など、学生運動が活発化
- ・ 受験競争が激化していく中で育つ
- ・ 男性が仕事に専念し、女性は家事・育児専門の専業主婦となることで、日本経済と家庭を支える
- ・ 家電製品が普及し、女性の家事負担が減少

<団塊の世代>



交通量の増加に対処して、今年は12基の交通信号機が設置される（1966年）



小売り業者は、品物を買ってもらうために、懸命に努力をばらう（1966年）

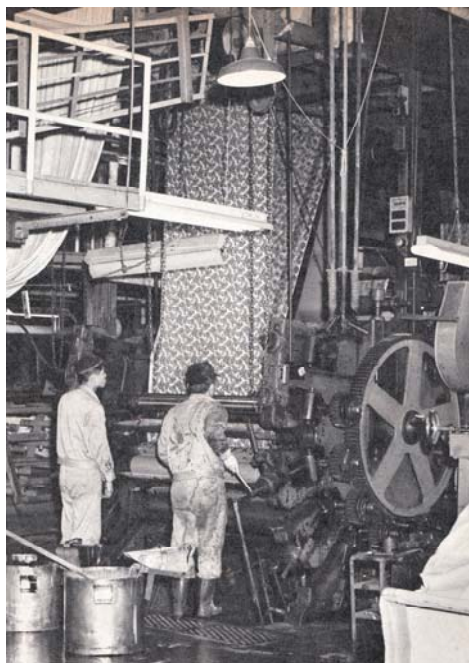


副業として盛んなワラ加工（1976年）

カラーテレビ（1960年）



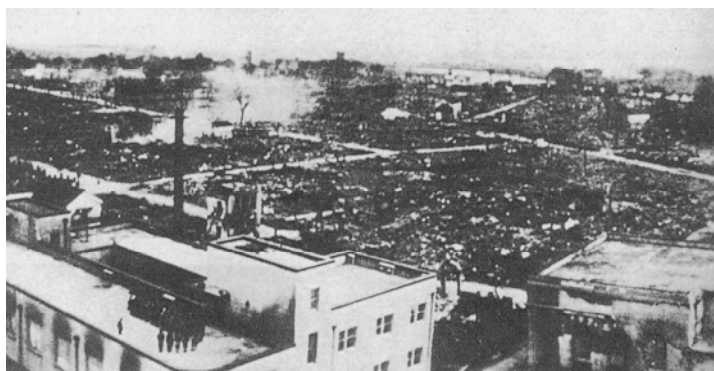
<戦前世代>



素晴らしい模様が熟練工の手によって鮮やかに捺染（なつせん）される（1961年）



青年の交際はあくまで健全に（1960年）



福井空襲（1945年）

## (2030年に向けた変化)

個人の心の変化		社会の変化
活動する心	→	地域社会の安定
見守り・見守られる心	→	相互扶助
伝える心	→	社会の再生産と継承

2030年の75歳前後の人は達年世代、老年世代と呼ばれ、福井の健康長寿の秘訣を継承しながら、介護・医療の総合的な予防・ケアシステム、最新の治療技術・テクノロジーを取り入れ、心身ともに健康長寿を享受するようになっていきます。

本人や周囲の介護等にかかる負担も大幅に軽減されるため、個人の選択に基づき自由に生活を楽しめる社会となっています。そこで、さらに心身ともに元気な達年・老年の福井人は、地域社会のキーパーソンとなり、地域社会の安定をもたらし、住民の多くが望む安全・安心な居心地の良い地域づくりに貢献しています。「健康でありたい」という状態から、「健康で活動したい」という能動的な気持ちに変化しているためです。

また、周囲を見守る一方で、誰かに見守られているという相互扶助の精神を培い、安心感を与える存在として、他世代にとってなくてはならない存在となっています。

さらに、自分や自分たちの希望を社会の中である程度実現し、そこから得られた知見を次世代に伝え、希望を次世代につなぐ役割を果たします。これまでの知識・技能を完成させ、次の世代に伝えたいと望むことから、先人から引き継いだ豊かな福井を再生産し、次の世代に未来を引き継ぐことができます。

< 世代の主な出来事 >

■時代と世代の関係図

年代	世相等				
	社会・経済	教育	男女共同	福井県	その他
2008年の年齢人口・割合					
世代の特徴					
1930年 (昭和5年)	世界恐慌('29) 国連脱退('33) 日中戦争('37~'45) 国家総動員法('38) 第二次世界大戦('39~'45)	国民学校令('41) 学徒出陣('43) 軍事教育全面強化('44)		人絹取引所開設('32)	
1945年 (昭和20年)	終戦('45)、日本国憲法公布('46) 国土総合開発法('50) 朝鮮戦争('50) テレビ放送開始('53) もはや戦後ではない('56)	教育意基本法・学校教育法各公布('47) 六・三・三・四制('47) 学習指導要領に「道徳」('58) 高校進学率52%('55) 大学・短大進学率10%('55)	大学の男女共学制決定('45) 初の女性週刊誌創刊('57)	福井地震('48) コシヒカリ誕生('56)	改正民法公布(家制度廃止)('47) 国連加盟(復帰)('56)
1960年 (昭和35年)	高度成長期('55~'73) 新日米安保('60) 東海道新幹線開通('64) 人口1億人突破('66) 高齢化社会('70)	金の卵 安保闘争('60) 家出少年の増加('66) 全共闘運動・大学闘争('69) 受験戦争	初の女性大臣('60) 核家族の進展('67)	北陸トンネル開通('62) 敦賀原電臨界('69) 集団就職受入 県内私鉄路線廃止 合繊織物最盛	農村の過疎化 家事の省力化(炊飯器、洗濯機) 日本原電・東海原発稼動('66) ビートルズ来日公演('66)
1975年 (昭和50年)	安定成長期('73~'91) バブル景気('86~'91) 日中平和友好条約('78) 国鉄民営化('87) 消費税導入('89)	高校進学率92%('75) 大学・短大進学率38%('75) 落ちこぼれ問題('77) 家庭内暴力・校内暴力・いじめ	婦人白書('78) 男女雇用機会均等法('85) セクシャルハラスメント('89)	繊維不況 工場の海外移転 福井港開港('78) 北陸自動車道県内全線開通('80) 人口が80万人を突破('82)	日本の平均寿命世界一('84) 海外純資産1298億ドルで世界首位('85) ファミコン累積生産台数1000万に('87)
1990年 (平成2年)	失われた10年('91~'02) 高齢社会('90)、介護保険法('00) 少子化('92) IT革命('00) 構造改革	男女混合名簿 学校週5日制導入('93) 総合学科の新設('94) ゆとり教育('02) 不登校・引きこもり	育児休業法('91) 家庭科の男女必修('93) DV法('01) 次世代育成支援対策推進法('03)	県立大学開学('92) ナボトカ号重油流出事故('97) NPO条例('98) 福井豪雨('04) 平成の大合併('04~'06)	就職氷河期('92~'04) アジア向け貿易額558億ドルでアメリカ向けを抜く('93) Windows95('95) 京都議定書('97) パラサイトシングル('97)
2005年 (平成17年)	人口減少('05) 団塊の世代大量退職('07) 石油価格高騰('07)	未履修問題('06) モンスターペアレント('07) 大学全入時代 義務教育期間が11~12年('09) 新学習指導要領('11)	熟年離婚('05) ワーク・ライフ・バランス 女性委員33%('10) 男性の育児休業取得率10%('14)	ふるさと納税('08)	京都議定書発行('05) 年金問題('07) 洞爺湖サミット('08) Web2.0
2020年 (平成32年)					
2030年 (平成42年)					
2030年の年齢 および人口(5歳階級推 計)・割合					



世代区分の名称							年代
戦前 ～1929年	戦後 1929年～1943年 (15年間)	団塊 1944年～1953年 (10年間)	新人類 1954年～1968年 (15年間)	団塊ジュニア 1969年～1983年 (15年間)	新人類ジュニア 1984年～1998年 (15年間)	(21世紀生れ) 1999年～2013年	
81歳以上 53,327 6.6%	66歳～80歳 132,961 16.4%	56歳～65歳 118,295 14.6%	41歳～55歳 150,981 18.6%	26歳～40歳 150,356 18.5%	11歳～25歳 121,376 14.9%	～10歳 83,230 10.2%	2009年の年齢 人口・割合
・戦前の教育で育ち、戦争や食料不足を体験 ・夫唱婦隨の考え方が強い	・子どもの頃に戦前と戦後を体験 ・高度経済成長を支えた世代 ・激しい労働争議を体験	・子どもの頃に高度経済成長を経験 ・激しい受験戦争を経験 ・全共闘や大学闘争を経験	・経済大国となった日本で成長 ・仕事よりも余暇を優先 ・ロック音楽や漫画、アニメ等のサブカルチャーを体験 ・核家族の拡大	・小学生で自室を持ち部屋にテレビがあるなど家庭がシングル化 ・就職氷河期を経験 ・子どもの頃からパソコン、インターネット、家庭用ゲーム機を使用	・バブル崩壊後の失われた15年に成長 ・携帯電話、メールでコミュニケーションを図る ・社交性を重視 ・ゆとり教育世代 ・男女混合名簿を使用		世代の特徴
	少年期 (5歳)						1930年 (昭和5年)
	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)					1945年 (昭和20年)
	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)				1960年 (昭和35年)
	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)			1975年 (昭和50年)
	達年期 (65歳)	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)		1990年 (平成2年)
	老年期 (80歳)	達年期 (65歳)	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)	2005年 (平成17年)
		老年期 (80歳)	達年期 (65歳)	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	2020年 (平成32年)
			老年期 (75歳)	達年期 (60歳)	熟年期 (45歳)	壮年期 (30歳)	2030年 (平成42年)
	87歳～101歳 42,800 6.1%	77歳～86歳 83,200 11.8%	62歳～76歳 133,600 18.9%	47歳～61歳 144,600 20.5%	32歳～46歳 117,600 16.6%	17歳～31歳 95,000 13.4%	2030年の年齢 および人口(5歳階級推計)・割合

## 第2章 2030年のふくい物語

### 蟹田家の物語

これは2030年の子ども世代、壮年世代、達年世代の物語です。

蟹田（かにだ）家は、福井の近郊で三世代同居で暮らしています。学校に通う子どもたちは家族や地域の人たちに見守られ元気に育ち、父母は仕事と家庭を両立させ、祖父母は地域社会の担い手として活動しています。

（登場人物）

蟹田 実（みのる）

2025年生まれ／5歳 子ども園年長  
好奇心旺盛な元気いっばいの男の子

蟹田 亜希（あき）

2021年生まれ／9歳 3年生  
友達と遊ぶのが大好きな女の子

蟹田 望（のぞむ）

2016年生まれ／14歳 8年生  
海外で活躍するエンジニアを夢見る男の子

蟹田 沙織（さおり）

1987年生まれ／43歳 実たちの母親  
介護老人保健施設で理学療法士として勤務

蟹田 直樹（なおき）

1985年生まれ／45歳 実たちの父親  
繊維会社をおじいちゃん（誠）から受け継ぎ経営

蟹田 恵子（けいこ）

1957年生まれ／73歳 実たちの祖母  
韓国のドラマに夢中になってから、韓国語を学び、韓国語講師も務める

蟹田 誠（まこと）

1955年生まれ／75歳 実たちの祖父  
コミュニティ交通の運営に参加し、コミュニティバスの運転手としても活躍

※蟹田は、福井県の魚の「越前がに」から名付けました。また、名前は、それぞれの生まれた年別のランキングの上位の名前等に基づき、「ふくい2030年の姿」検討会において作成していますので、実物の人物・団体等とは一切関係ありません。

## 2-1 子どもの生活（子ども世代：0～16歳）

### 第1話 人に囲まれた子どもたち（地域での人づくり）

#### ○学校・地域・家庭の「社会総ぐるみ」による教育

- ・地域の達年世代による「学習サポート」や「見守り活動」が展開
- ・近所の子どもたちが集う「コミュニティホーム」とその管理者「コミホマスター」を指定し、放課後や休日のこどもの活動の場を確保
- ・家庭での教育を充実するため、家族に対する「家庭教育推進プログラム」を実施

◆ 亜希（9歳）は、学校から帰るとすぐに、子どもたちに勉強を教えている地域のおばさんの家に向かいます。このおばさんは元教師で、家は近所の子どもたちが集う「コミュニティホーム（コミホ）」に指定されており、おばさんは「コミホマスター」です。コミホには近所のお兄ちゃん、お姉ちゃんも集ってきて、自分のパソコンを使って通信宿題です。通信環境が発達していて、亜希も幼い頃から、パソコンを使って遊んでいたもので、手慣れたものです。自分のペースで宿題をしています。どうしてもわからない算数の問題やもっと教えてほしい理科の問題などは、おばさんやお兄ちゃんたちが教えてくれるので、わかることが楽しくなってきました。最近では、いろんなことに「なんで？」「どうして？」と疑問がわき、おばさんをよろこばせています。

また、おばさんは、福井の偉人の話をしてくれて、その人がやったことやどんな苦労があったかを話してくれます。亜希は、小さいながらも「福井の先人はすごいんだなあ」と思っています。

宿題が終わると、コミホのみんなで、公園でかくれんぼです。学校のクラスとは違って、年上のお兄ちゃんやお姉ちゃんと遊ぶので、人との付き合い方も自然に身に付いています。公園では、地域の達年の人たちが、地域の緑を増やそうと公園にビオトープなどを作る活動をしているので、大人に見守られながら、安心して遊んでいます。

家に帰ると、ママ（沙織：43歳）がパパ（直樹：45歳）に「家庭教育推進プログラム」を教えていました。勉強熱心なママは、パパと今週の日曜日に実施される父親のためのプログラム試験の予習をしています。

直樹は、試験よりも座談会の方が楽しみです。エコ活動や交通マナーなど家での決まりごとや子どもの成長などについて、父親同士が気軽に意見交換できるからです。子どもは親の背中を見て育つと昔からいわれていますが、元気なおじい

ちゃん、おばあちゃんが増えたので、孫育てのおじいちゃん、おばあちゃんの背中を合わせて4つの背中を見て子どもは育つのかなと思うようになっていきます。

### ○「希望の輪」による希望の広がり

- ・私の希望が私たちの希望に広がる「希望の輪」を導入  
(希望学によると14才の時に希望を持つ子は将来も希望を持つ割合が高い)
- ・子どもたち自身がヒーロー、ヒロインになる目標を持つ教育を実施

- ◆ 亜希は、1年生の時に、クラスでひとりだけなわとびを上手に跳ぶことができませんでした。その時、学校や家で一生懸命練習しても、なかなか上達することができなかったのですが、友達の結衣ちゃんが一緒に練習してくれて、少しずつ上手に跳べるようになりました。亜希が「ありがとう」というと、結衣ちゃんは「亜希ちゃんが一生懸命頑張っていたので、私も亜希ちゃんがなわとびを跳べるようになってほしいと思ったの。」とっていました。今、亜希は、なわとびが大好きです。跳べない子がいると、結衣ちゃんのように練習の手助けをするようになっています。亜希は、他の子の「なわとびが跳びたい」という想いを感じて、それを手伝ってあげたいと思うようにもなりました。

一方、望（14歳）は、最近、将来の夢を実現するためにはどうしたらいいかを考えるようになりました。5年生の時に、インターネットテレビで世界の水資源が枯渇していて、海水を淡水にする技術とそこで活躍する福井のエンジニアの姿を見て以来、ずっと海外で活躍することに憧れを抱いています。学校では、世界中で活躍している福井出身の人のことも教えてくれます。そして、その人たちから直接話を聞く機会も増え、望にとっては、その人が身近なヒーローといったところです。学校では、子ども一人ひとりが目標となる身近なヒーローやヒロインを持って、また、それに近づき、自分自身がヒーローやヒロインになるように教えています。今では、望は理科系の大学に進学してエンジニアになり、水資源が不足している世界の各地域で、自分の力を活かしたいと具体的な夢のイメージがふくらんできました。

### ○地域の達人による課外活動

- ・学校単位の部活動は地域のスポーツクラブ活動へ移行
- ・子どもは、複数のサークル（部活）に在籍

- ◆ 望は、学校の授業が終わると、そのまま近くのスポーツセンターに向かいます。小さい頃から、仙水翔太（21歳：P143参照）たちが教えるスポーツクラブでテニスを習っています。学校での部活動がなくなったため、先生の負担も減りました。スポーツの上手な先生は、スポーツクラブの指導者として翔太たちと一緒に教えています。

翔太たちも、子どもたちに教える技術を高めるために、交流会を開いたり、NPO等のインストラクターの認定も受けています。

一緒にテニスを習っているのは、隣の中学校の友達です。最近では、学校対抗で試合をすることは珍しく、スポーツクラブ対抗が主流になっています。自分がしたいスポーツのクラブには、自由に入会でき、望も一時期剣道を習ったことがありました。

来月は、いよいよクラブ対抗戦です。対戦相手は、年上の中国からの留学生ですが、胸を借りるつもりで、思いきってプレーしようと思っています。

望は、テニス以外にもバンドサークルに入っています。おじいちゃんが若い頃にロックバンドをしていた話を聞きながら、いつか、おじいちゃんとセッションができればいいなと思っています。

## ○コミュニティ交通の発達

- ・ 地域の達年が社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）を設立し、地域の足を確保
- ・ コミュニティバス専用の運転免許を創設
- ・ 移動直売やリラクゼーション設備などバスが多機能化

- ◆ 望と亜希は、毎朝、地域の達年が運営している地域のコミュニティバスに乗って通学します。バス停までは10分程度歩きますが、通勤・通学時間帯は、電気バスが切れ目なく地域内を循環しているので、停留所に着くとすぐにバスがやってきます。望や亜希だけでなく、父親の直樹も通勤に利用し、3つ先の停留所で次のコミュニティバスに乗り換える予定です。

今日のバスの運転手は、望たちのおじいちゃん（誠：75歳）です。社会的企業が運営主体になり人件費が大幅に削減されるとともに、電気バスのエネルギーには家庭での太陽光発電の余剰電力などを利用することにより、燃料費も大幅に削減され、低料金のコミュニティバス複数台を地域内で循環させることが可能となっています。

### ○学校の空き教室を活用した「福縁サロン」

- ・小中学校を活用して、子どもや高齢者が集う「福縁サロン」を設置
- ・「福縁サロン」には地域の暮らし相談室を設置
- ・地域の達年、老年世代が、子どもと関わり、地域全体での多世代が共生する「三世代地域」を実現

- ◆ 亜希は、宿題のない日は学校に残ってそのまま遊びます。毎日、老年世代、達年世代の人が小学校に遊びに来ているので、放課後や休み時間にも、地域のおじいちゃん、おばあちゃんと遊びます。

今日は、おばあちゃんが本の読み聞かせをしてくれる日です。男の子は車の本がいいみたいですが、今日の本は、前からお願いしていた「赤毛のアン」の日です。

小学校が地域に開放されているので、高齢者が空き教室を「福縁サロン」として活用しています。そこでは、達年世代がルービックキューブやヨーヨーなど、懐かしいおもちゃの遊び方を教えてくれます。

今日は、来月から転校してくる子が親子で来ているようです。サロンは、転入者の窓口にもなっていて、達年世代の人が「地域の暮らしで困ったことがあったら、このサロンに相談してください。」と説明しています。この家族は、三世代同居世帯ではないようですが、このサロンで遊んでいるうちに、地域のおじいちゃん、おばあちゃんが転校してくる子の祖父母のようになっています。

### ○保護者が安心できる小児医療提供体制の整備・運用

- ・家族の健康状態を家庭で毎日管理し、異常があればかかりつけ医に健康データが自動的に送信され対応を相談できるなど安心の地域医療体制を整備
- ・子どもの病気や怪我の際に必ず受け入れてくれる救急医療体制を整備
- ・子どもの病気、病後のときなどに預けられる施設が充実

- ◆ 実(5歳)は毎日、家に備わっている体調チェック機で、体温やおなかの調子、この前転んでできたすり傷などをチェックしています。お母さんが、「今日も大丈夫ね。」と言って、学校へ送り出しています。

実の健康状態は、かかりつけの小児科医に送信されて、異常があれば医師から連絡があるので、両親も安心しています。さらに、子どもの顔色が悪いとか、元気がないなど思っても、医療機関とディスプレイ会話で子どもの表情を見ながら相談ができます。

実が風邪を引いたときでも、医療機関で1日様子を見てくれるので、安心して仕事に行くことができます。

## 第2話 本物志向の体験（実体験機会の増加）

### ○夏休み・冬休みに「体験型学習カリキュラム」を実施

・企業、NPOの協力で「体験型学習カリキュラム」を実施

- ◆ 亜希は、次の夏休みに農村での宿泊体験を楽しみにしています。これも授業の一環ですが、引率してくれるのは、いつもの先生ではなくて、会社の人やNPOの達年の人たちです。

普段、共同農園（シュレバーガルテン）で野菜づくりを体験しているので、今回の宿泊では、牛の世話をしてみたいと思っています。朝のしぼりたての牛乳は最高に美味しいと聞いているからです。最近では、牛乳パックにICチップが付いていて、その牛乳の作られる過程を見ることができますが、やっぱり自分で体験してみたいと思っています。

今回、引率してくれる人は、いつもは食品を加工している会社で働いている人です。特に、食べ物を扱う会社では、子どもたちに自然や食べ物大切さを知ってもらって、この環境を守ってほしいとの考え方が浸透しています。

宿泊体験には、全国から子どもたちが集ってくるので、友達がたくさんできるといいなと思っています。望お兄ちゃんも、この宿泊体験で九州の友達ができて、いまでもテニス大会の結果や音楽の話ディスプレイ会話でしています。

### ○学校での地産地消給食、自宅での食育

・地域の共同農園からの農作物の提供などにより地産地消100%のおいしい給食を実現

・食育を学んで育った親世代が中心となって、家庭や地域での食育を推進

- ◆ 亜希の給食は、100%地産地消の食材で作られています。毎朝、地域の共同農園（シュレバーガルテン）でとれた農作物が達年の人たちによって、学校に持ち込まれます。野菜の色や形はそろっていませんが、地域の達年の人たちが心を込めて作っているので、先生たちも安心して子どもたちに出しています。子どもたちも、野菜のとれたたてのおいしさやおいがわかるようになって、上級生のお

ねえちゃんの中には、すでに「野菜ソムリエ」に認定されている子もいるほどです。

学校には畑が併設されていて、植えから収穫までを体験します。農作物の成長から、農作物の栄養までも勉強できて、食べ物を通して、学ぶ範囲が広がっています。

今日は、地域の達年の人たちが献立を考える日です。地域の伝承料理や家庭のオリジナル料理が出されるので、とっても楽しみです。家に帰って、お母さんに給食のことを話すと、「ママも料理の勉強をしないでね。」と、はりきります。母親の沙織も、食育はおばあちゃんや子どもからも教えてもらう一生の勉強だなと思っています。

週末には、家族そろって、近くの共同農園で過ごします。おじいちゃんの作る野菜は最高においしいです。ただ、あおむしに食べられてキャベツの葉には穴がたくさんあいています。お父さんは『自然でとれたあなまきロールキャベツ』を得意料理にしています。

### 第3話 学び

#### ○子どもの頃からコミュニケーションスキルを伸ばすため、体系的な「幼児教育カリキュラム」が開発され・実施

- ・幼稚園、保育園を統合し地域に開放された子ども園を実現
- ・子どもの減少に対応し、コミュニケーションスキルを重視したカリキュラムを実践

◆ 実は、子ども園に通っています。子どもの数が減少し、保育園、幼稚園の統廃合が進みましたが、コミュニティバスや「愛の相乗り」などを利用し地域が連携して送迎することにより安全な通園が可能となっています。

子ども園では、年下の子どもたちと一緒に遊びます。みんなでお散歩に出かけたり、お遊戯の練習をしたり、年上の子どもも年下の子どもと一緒に兄弟姉妹のように遊んでいます。最近では、蟹田家のように兄弟姉妹がいる子どもも多くなりましたが、やはり1人っ子も多いです。

午後からは、地域のおじいちゃんやおばあちゃんが子ども園にやってきます。今日は、おじいちゃんが、20年前前のオリンピックの水泳で金メダルをとった人のことについて話をしてくれる予定です。実は、スイミングスクールに通っているので、ぼくもがんばろうと思っています。



## ○電子教科書が普及し、家庭でも電子教材による学習が可能

- ・電子教科書により子どもの理解のレベルに合わせた複数の教え方が可能
- ・パソコンの普及で漢字を書くのが苦手な人が増加したため、子どもたちには、手を動かして、体で覚える学習を重視

◆ 望は、学校に本を一冊持っていくだけです。本は、電子教科書になっていて、全ての教科書が内蔵されています。電子教科書には、参考図書も多く付いているので、自習時間には、世界の観光地や建造物の写真を眺めています。将来、エンジニアになりたい望は、電子教科書で最先端の研究所やロボット工場の動画の紹介を眺めては夢を膨らませています。授業中も参考図書に夢中になってしまうので、よく先生から注意されます。

また、電子教科書では、同じページでもいくつかの解き方が載っていて、わからない方程式も自分に合ったやり方で教えてくれるため、スムーズに理解できます。ここまでの勉強で全くわからないところはないので、勉強もスイスイです。

家では通信宿題です。妹の亜希は、近所の家でみんな一緒に勉強ですが、望はテニス帰りのコミュニティバスの中で、英語のヒアリングを済ませてしまいました。家では、世界の環境や世界の地理を勉強します。

もちろん、電子教材だけでなく、白川文字学と組み合わさった漢字の書き方の反復練習、算数の筆算などの紙に書く宿題もあるので、手で覚えることも大切だと思っています。さらに、理科の実験や美術などは、実際に体験することが大切なので、ひらめきや発見を重視する授業になっています。

## 2-2 父親・母親の生活（壮年世代：32歳～46歳）

### 第1話 循環型シェアリング文化の広がり

#### ○ホームシェアリング、カーシェアリングの広がり

- ・ 家族構成の変化に伴い、簡単に増減築やリフォームできる住宅が実現
- ・ ご近所とのカーシェアリングやホームシェアリングが普及

◆ 「おはよう！」4年前に増築した子ども部屋から望がリビングへ入ってきました。父親の直樹（45歳）は、そろそろ亜希（9歳）にも個室が必要かなと思っています。望が生まれたとき優遇税制を活用して建てた二世帯住宅は、増減築が容易にできる造りになっています。ご近所では、子どもたちの独立により空いたスペースをリフォームして大学を出て東京にいる友人家族に貸すホームシェアリングをしている家もあります。

「行ってきます。」直樹は、朝食を終えると、子どもの望（14歳）と亜希と一緒に家を出ます。直樹は、父親の誠（75歳）が経営していた繊維会社を受け継ぎ、不況で苦しかった2009年の「グリーン・ニューディール」をきっかけに、それまで培ってきた技術を活かした環境ビジネスを始め、業績をのばしてきました。

「今日は職業体験の授業でメガネ工場へ行くんだよ。」望の学校での様子を聞きながら歩いてバス停に着くと、すぐにコミュニティバスがやってきました。

母親の沙織（43歳）は、3人を見送った後、理学療法士として勤務する介護老人保健施設へ出勤です。今日は、実（5歳）とご近所の礼子ちゃんを子ども園に送るため、ご近所でシェアリングしているシェアカーを使います。カーシェアリングをしている家族が交代で子どもの送迎を担当しています。

#### ○公共交通や自転車の利用率が増加

- ・ 道路空間の再配分によりスロードライブ車線や自転車専用車線を整備
- ・ 電気自動車や小型の低速型車両（ゴールデンビークル）が普及
- ・ サイクル&ライドが普及

- ◆ バスの車窓から外を眺めていると、直樹は自分がマイカー通勤をしていた15年前を思い出すことがあります。「パパ。何を考えているの？」亜希が聞いてきました。「パパが会社に入ったばかりの頃は、毎日渋滞していたんだよ。スロードライブ車線もなかったなあ。あれ、あそこに走っているのは懐かしいガソリン車じゃないか。そう言えば、福井は自動車保有率日本一だったんだよ。」

ふと見ると、直樹の会社で働く大森さんが、バスのすぐ近くを自転車で走って行くのが見えました。「そういえば、大森君、最近運動不足で体が重いつて言ってたなあ。」どうやら運動不足を解消するため、自宅から最寄駅への移動もマイカーから自転車に代えたようです。朝の日差しの中を気持ちよさそうに走る大森さんを見て、直樹は子どもたちに「今度の日曜日、三方五湖をサイクリングするか。」と話しかけました。

## 第2話 テレワークなどの活用でワークライフバランスが実現

### ○テレワークやオフィスシェアリングの広がり

- ・ ICT技術の発展によるテレワークの実現
- ・ オフィスシェアリングにより収益性の低い社会的起業が容易になる
- ・ 自動翻訳機により、世界を相手にした仕事が増加

- ◆ 自転車通勤を始めた大森さんは、週3日会社で勤務し、残り2日は在宅勤務しています。会社に勤め始めた頃は、夜遅くまで残業することがありましたが、今は、自宅にいながらディスプレイで会議や取引先との商談などができるため、夕食は家族と一緒に食べるように帰宅しています。過労死が社会問題として話題になることもなくなりました。

また、自宅でできる仕事の範囲が広がったことで、大きな事務所を構える必要がなくなり、特に若い経営者たちの間では「オフィスシェアリング」が広がっています。最近、工場栽培の野菜を流通・販売する会社を立ち上げた大森さんの同級生も、同じように独立した若い起業家と事務所を共同使用するようです。

一方、沙織は、子ども園に寄ったため、いつもより30分遅く介護老人保健施設に着きました。高齢者の介護は、運動機能補助機器（ロボットスーツ）の普及で楽になりましたが、患者さんが機器を使いこなすには訓練が必要です。その訓練に理学療法士は大きな役割を担っています。そのため、仕事は相変わらず大忙しですが、数年前から、勤務時間が自由に選択できるようになり、子育てに当てる時間を十分確保できるようになりました。

沙織は現場のリーダーなので、介護の最新情報を入手するのも重要な仕事です。今朝のニュースで新たなロボットスーツが中国で開発されたといっていたので、空き時間に、早速、インターネットで開発したメーカーのサイトを検索しました。今は、自動翻訳機により、言葉の壁はありません。すぐに気になる点をメールで質問です。

### 第3話 みんなで楽しむ子育て

#### ○地域のみんなで楽しく子育て

- ・家事、育児の男女共同が充実
- ・家庭で福井の伝承料理を継承

◆ 午後3時。直樹は、下校の見守りをするため、一足早く退社します。以前は、地域の老年、達年世代が主だった活動も、フレックスタイム制の導入が進んだことにより壮年世代も増えてきました。地域を巡回したり、子どもと話をしたりすることで、地域への愛着も一段と深まっています。最近では、以前の見守りの意味も、子どもを不審者から守るという意味合いから、子どもの成長を見守るという意味に変わっています。

「ただいま。パパは見守りなのね。」沙織が帰宅しました。いつも、帰りの早い方が夕食の準備をします。食材は、週末に1週間分まとめて注文し、毎日、人数分の新鮮な食材が届くようになっているので、とっても便利です。

おいしそうなおいにお誘われて、子どもたちも台所に集まってきました。パパも戻ってきたようです。「亜希ちゃん。おじいちゃんたちを呼んできて。ごはんにしましょう。」

「いただきます。」今日の料理の中には、おばあちゃんの恵子（73歳）から教えてもらった福井の伝承料理「里いもの煮っころがし」もあります。「上手に煮えてるわね。美味しいわ。」のおばあちゃんの恵子の言葉に、沙織はとてうれしくなりました。

#### ○祖父母世代の子育て支援と夢育

- ・元気な祖父母の子育て支援が継続
- ・人材育成のための学習機会が充実し福井独自の夢育が実現

◆ 夕食の後片付けは家事ロボットにまかせ、沙織は、小学校の空き教室で開催されている大学のサテライト講座に出かけました。最新のリハビリテーションと、仕事を通じて興味をもった美術について学ぶため、1年ほど前からこの講座を受講しています。最近仲間もたくさんでき、学んだ知識を仕事に活かしてという実感も得られるようになってきました。「これも、パパやおじいちゃん、おばあちゃんが子どもたちの面倒をよく見てくれるおかげだわ。」といつも家族に感謝しています。

直樹も、実をおじいちゃんにまかせて、望と亜希と小学校に出かけます。今日は子ども会のある日。テーマは、「子どもたちの夢をはぐくむ『希望の輪』を楽しく学ぼう！」です。特に、失敗から新たにチャレンジする気持ちにつながる考え方は、大人にとっても参考になります。子どもたちも、興味津々の様子で話しを聞いています。

子ども会では、他にも体験会や合宿など様々な活動を活発に行っていて、子どもたちにとって、親や先生以外のいろんな大人と触れ合うことのできるよい機会になっています。また、親たちにとっても、他の親や子どもたちの様子を見ることで、学ぶことがたくさんあります。

## 第4話 地域活動・ボランティア活動・余暇活動の充実

### ○地域でのボランティア・余暇活動が活発に

- ・ 地域での「一人一役」により途絶えていた地域の伝統的行事などが復活
- ・ 外国人観光客の誘客など、新たなコミュニティビジネスにより人々が交流

◆ 今日の日曜日。月に1回開かれている地域の祭り保存会の集まりがある日です。この地域には、古くから伝わる神社の祭りがありましたが、後継者不足で一時期途絶えていました。その祭りを5年前、有志が力をあわせて復活させたのです。今は、秋の本番に向けて、全体踊りの練習日程を相談中。保存会に参加する地域外の地元出身者も増え、祭りは年々、盛り上がっています。保存会のメンバーも準備に熱が入ります。

沙織は、亜希と実と近くの観光案内所へ。海外では、「ヘルシーへしこ」などの福井食ブームが起きていて、外国人観光客が急増中。沙織は、月2回、観光ボランティアをしています。案内所にはいろんな国の人たちがやってきます。ふと子どもたちの方をみると、外国人観光客の子どもとすぐに仲良くなった様子。子どもたちも一緒によい刺激を受けられるこのボランティアを、とても気に入っています。

○二地域居住の増加

- ・ 福井と都会との交流が容易になり「週末は都会に住む」という選択も増加
- ・ 二地域居住者とともに農作業をする人も増える

◆ 直樹は帰宅すると、お隣の木村さんから預かっているコロ（犬）に餌をやりま  
す。木村さんは、時々、週末に親子で東京へ行き、短期で借りられる高層マンシ  
ョンで過ごしているのです。数年前の新幹線開通で首都圏へのアクセスがよくな  
り、「暮らすなら福井だけど、都会の生活にも憧れる。」という人たちの中には、  
「週末都会暮らし」をする人も出てきているのです。

週末の午後は、一家全員で農作業です。昼食後、歩いて10分ほどの共同農園  
(シュレバールガルテン) へ出かけます。蟹田家が借りているのは、一昔前まで駐  
車場だった住宅街の一画です。今では住宅地のあちこちに、こうした農園が広が  
っています。結婚するまでほとんど農作業の経験がなかった沙織も、昔農家だっ  
た隣区画の伊藤さんに教わりながら徐々に慣れてきました。土に触れていると、  
仕事の悩みや疲れも忘れ、心身ともにリフレッシュできるのを感じます。今日は、  
子どもたちと一緒にさつまいも掘りに挑戦。大きなさつまいもがたくさんとれて、  
子どもたちも大喜びです。

「みなさんおそろいで、ご苦労さまです。」草とりや収穫の作業をしていると、  
農園の近所に住む松井さん夫妻が通りかかりました。直樹が声をかけると、これ  
から大阪からやってくる友人と山のふもと近くに所有している農地へ出かける  
ところだといいます。松井さん夫妻は、「Eサポーター」として耕作放棄地の活  
用と里地里山の管理をしています。直樹も、松井さんたちの管理する里山で作業  
を手伝ったことがあります。日本の原風景を思わせるいいところです。

農作業のあとは、農園でとれたての野菜を使ってバーベキューです。近所の子  
どもたちも集まってきて、にぎやかなパーティーは夕暮れまで続きました。

## 2-3 祖父母の生活（達年世代：62～76歳）

### 第1話 ソーシャルキーパーソン（地域社会の担い手）

#### ○コミュニティビジネス（コミュニティ交通の運営）

- ・子どもや高齢者など交通弱者を達年世代が運営するデマンド方式の「コミュニティ交通」が支える
- ・「ITS交通事故減・追突防止システム」の発達で、高齢者でも安全運転が可能

- ◆ 今朝は、誠（75歳）がコミュニティバスを運転する日です。朝1時間の地域活動ですが、早起きできるし、子どもたちの元気な顔を見ていると自分も元気になると、自分から進んでコミュニティバス専用の運転免許も取りに行きました。

科学技術の進歩で、「ITS交通事故減・追突防止システム」が実用化され事故が大幅に減少しました。コミュニティ交通は地域の達年世代がバスの運転や交通全体の運営もするようになっていきます。

コミュニティバスは、地域の達年たちが、社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）により運営していて、安い運賃で運行されています。利益も、バスの増便や停留所の改造などに還元されるため、みんなが乗れば乗るほど便利になるととても好評です。

これまで、施設ごとに持っていたマイクロバスなどの管理を、社会的企業“タツネン”が一元管理することにより、人件費や維持管理費などのコスト縮減と運行回数のアップが可能となりました。

誠は、時々、昼間の多機能バスの運転も担当しています。野菜の直販やリラクゼーション機能を持った多機能バスでは、老年世代が自ら作った野菜を持ち寄りたりリラクゼーションルームでの交流を行っていて、バスが地域の潤滑油のようになっていると感じています。

#### ○知識を活かしたNPO等の創設

- ・達年世代が地域でNPO、社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）を創設
- ・社会的役割を確保した達年は充実した人生を送っている
- ・NPO、ソーシャル・エンタープライズ等の活動によりQOCを向上

- ◆ 誠は5年前に、気心の知れた元会社の同僚を中心に社会的企業、その名も“タツネン”を立ち上げました。今では輪が広がり、元同僚以外にも地域の住民が参加するようになっていきます。

誠は、自分たちの世代が、地域のきずなを強める存在であると思うようになり、これまでの知識や経験を地域に還元したいと思っています。また、自分が子どもの時に比べ、子どもの数は減少しましたが、息子の直樹（45歳）が孫の望（14歳）や亜希（9歳）と一緒に、小中学校に出かける姿を見ていると、子どもたちがつなぐきずなもまだまだあるなと思っています。

誠は、年に1回、“タツネン”のメンバーと地元の小学校の子どもたちと、地域調査をすることにしています。調査では、地域で暮らす人々が豊かに暮らすためには何が必要か、どのような地域にしたいか、また、自分たちが地域の幸福度（QOC）を向上させるために、何ができるかを考えます。子どもたちも、調査では探検隊のようにチームを組んで一緒に調べて、いつも外で遊んでいる子どもからは、大人の知らないようなことを教えられることも多くあります。調査はみんなが参加できる地域の楽しいイベントになっています。

さらに、“タツネン”の運営目的は地域社会への貢献のほかにもたくさんあり、多くの達年世代が所属しています。“タツネン”が活躍する場面は次のとおりです。

- ①青年世代のニート対策として、就職斡旋・紹介、仕事の技術提供（職業教育）、訪問、話し合い等を行います。今日も青年世代のニートとの意見交換会で、働くこととはどういうことか、人生の先を見据えた行動とはどういうことかを話し合いました。家族と先生以外の大人をほとんど知らない参加者の一人にとっては世界が広がる意見交換会となりました。
- ②共働きの世帯に対しては、子どもの送り迎えや、仕事が終わるまでの預かりなど、地域の孫育てをしています。男女共同参画のサポートとして、地域の孫育てを行う“タツネン”の役割は次第に大きくなっています。子どもたちが地域の大人たちと顔を合わせて話をするすることで、子どもたちの世界も広がっていきます。
- ③ボランティア団体に対しては、地域の情報収集・発信に伴う交流、また、会計経理、会場の設営などをサポートします。ボランティア団体が活動に集中できるよう、事務的な仕事を“タツネン”が請け負います。また、地域の困っていること、解決すべきことを地域に密着した“タツネン”が情報収集・発信することにより、ボランティア活動がスムーズに行われています。
- ④豊富な情報収集力と消費者ネットワークを活かし、シュレバーガルテンで生産する作物についてアドバイスを行います。シュレバーガルテンの運営上の問題の一つに、生産物の流通先の確保があります。地域に密着した“タツネン”はその豊富な情報網を活かし、生産物の流通を促進します。



- ⑤シルバー人材センターの機能が充実し、会社の会計経理や行政手続などの仕事も行い、収入を得ています。企業は会計経理等を“タツネン”にアウトソーシングすることにより、その分の経費が削減されます。
- ⑥簡単な道路改修や整地などを低コストで請負います。
- ⑦地域の交通機関であるデマンド交通、コミュニティ交通の運営管理を行い、安価で便利な交通システムを形成しています。
- ⑧QOC向上のための調査や、調査結果に基づく地域の改善を行っています。

### ○在宅介護から地域介護へ

・介護資格を取得する達年が増加し、達年世代が「地域介護」の中心に

- ◆ 平日の午前中、恵子（73歳）は、家事ロボットを駆使して家事全般を手早く片付けます。昼前になると、近所に住む一人暮らしのおじいちゃんの家に出かけます。

おじいちゃんとおしゃべりの花を咲かせながら、栄養バランスが取れた自慢の家庭料理を作ります。料理は見栄えも大切です。ホームヘルパーの資格は持っていませんが、料理が得意なのでこの特技を活かし地域に貢献しようと、地域の介護サークルにボランティア登録をしています。ボランティアといっても無報酬ではなく有償ボランティアです。無理なく続けていきたいので、平日のお昼の数時間と決めて、活動しています。ただ最近は、料理だけではなく、おじいちゃんのいろいろな相談にも乗れるよう、ホームヘルパーの資格に挑戦しようかと考えているところです。

今では、高齢者の一人暮らしも多くなったので、達年世代が中心となって、老年世代が家から外にでるイベントなども開催しています。今月は、小学校で、郷土料理等を持ち寄り、みんなで集まって食事会を予定しています。カラオケも準備しているので、老年世代の人たちにとってもストレス解消になると思っています。

先月のイベントは落語大会でした。以前に、福井で始まった女性落語大会が今では、世界大会になっていて、外国人の落語家や英語での落語などいろいろな部門のチャンピオンが誕生しています。みんなで大笑いして、大変好評のイベントです。

## 第2話 ワーク a n d コミュニティ（仕事と地域活動の両立）

### ○元気な達年世代が継続的に働ける達年ワークシェアリング

- ・ワーク a n d コミュニティの両立
- ・地域資源を活かす労働で地域が活性化

- ◆ 社会的企業“タツネン”は地域の空き家や空きスペースの管理・運営も行っています。今日は以前、会社として使われていたビルの再利用計画についての立会です。誠はこの地域の雰囲気やニーズを、新規オープンを考えている店主に伝えるなど、地域に合った店を出店するためのコーディネーターの役割を担っています。その店は紹介料とアドバイス料などをタツネンに支払い、タツネンの収入になります。また、タツネンの発行する地域フリーペーパーに新しい店の紹介が出されるため、広告宣伝費用が格安で抑えられ、また、タツネンの太鼓判がついた店として紹介されます。

## 第3話 孫育て

### ○地域の子どもたち育て

- ・達年から子どもまで楽しめる多様なサークルや教育が実現

- ◆ 恵子は、午後から小学校の福縁サロンに行きます。福縁サロンには、子どもたちや近所の高齢者が集まってきています。福縁サロンでは、いくつかのサークルが開かれており、子どもたちも高齢者も自由に参加しています。

恵子は、クラシックの音楽鑑賞のサークルによく参加します。今日は、孫の亜希と実（5歳）もいっしょに参加しました。このサークルは、みんなで楽曲を鑑賞し、感じたことを話し合います。以前は、クラシック音楽の良さがよくわかりませんでした。このサークルに参加してから、クラシック音楽の味わい方が少しずつわかってきました。いっしょに参加している子どもたちの自由な意見は、本当におもしろいです。亜希は「お花畑の中でお昼寝をしている気持ちになった」といい、周囲の達年たちを笑わせていました。

自分だけではなく、子どもたちも、クラシックは決して堅苦しいものではなく、楽しいものだと実感しているようです。

## 第4話 豊富な時間の過ごし方

### ○多様な生涯学習が可能に

- ・ 達年世代が気軽に講師を務める多様な教室が実現し、参加者が急増
- ・ 地域や個人レベルの国際交流がさかん

- ◆ 恵子は、25年前に韓流ドラマに夢中になり、その影響で韓国語の勉強を始めました。字幕版の韓流ドラマや映画を楽しんだり、テレビの韓国語講座を視聴するなどして始めた勉強ですが、継続は力なりで、今ではすっかり韓国語上級者です。

韓国にもよく旅行に行くようになり、今年も3回は韓国に行きたいと思っています。特に、韓国の鍋料理とサウナとエステにはまっています。韓国に友人もできました。友人とは、ディスプレイ会話で交流していますが、時々、日本へ遊びにきます。釜山から敦賀まで高速船を利用すれば半日で行けるため、1泊2日の小旅行にはぴったりです。その時は、蟹田家に泊まり、自慢の福井の伝承料理を振舞っています。

恵子は、週1回、福縁サロンで開催している韓国語初級クラスに講師として呼ばれています。今では、多くの韓国人が観光で福井へやってきます。自動翻訳機の普及で日常会話には不自由しなくなりましたが、韓国の習慣や料理の基礎も学ぶ初級クラスは宿泊施設や店舗で働く若い世代の受講生でいつもいっぱいです。

### ○共同農園（シュレバーガルテン）での農作業

- ・ 健康の維持や自給自足、おすそ分けのため共同農園が普及
- ・ 都市住民との間で「緑の親戚」関係が成立

- ◆ 今日は共同農園で、採れた野菜を使った野菜づくりコンテストとバーベキュー大会を行います。誠の作った野菜は惜しくも準グランプリ。「来年こそは・・・。」と決意を新たにしました。実たちは、子ども同士ではしゃいで、泥んこになっています。直樹や沙織（43歳）もここで新たに知り合った人たちとウィークタイズの関係を築いています。また、他の地域からもこの共同農園を利用する人がたくさんいて、他の地域の人たちとの新たな友人関係が築かれています。

共同農園での先生は達年世代です。といっても、多くの達年は共同農園で農業を始めた人がほとんどです。今日も農作業をしたことのない孫たちと一緒に、芋掘りやトマトの植え付けを行っています。力仕事は壮年世代の役割です。

休憩の合間には、小鳥たちのさえずり、風になびく木々のざわめきを聞きながら、おいしい空気を吸い、採れた野菜はそのまま食べます。直樹たちにとっても、日常の喧騒から離れられる、心が休まる大切な時間となっています。

共同農園などで採れた農作物は自分たちで食べる他に、東京や大阪に暮らす人々にも“タツネン”を通して、おすそ分けしています。「緑の親戚」と呼ばれていて、都市に住む人たちは、おすそ分けのお返しに、Eサポーターとして、農作業や里地里山の保全活動をしています。都市に住む人とも農作物を通して、新たなつながりができて、誠は、「もっとおいしい農作物を提供するぞ。」と意気込みを新たにしています。

### ○シニア・シルバー産業の活性化

- ・ 幅広い分野にわたるシルバー産業が発展
- ・ 高齢者の増加に伴い、シルバー産業のシェアが増大

- ◆ 達年世代は、自身の体験をもとに、市場のニーズを敏感に感じ、かつ幅広いネットワークを持っているため、シルバー産業の中核を担っています。

誠は、昔、繊維会社を経営していたノウハウで、福井の特殊な素材とデザイン力を活かして、ユニバーサルデザイン商品開発を考えています。老化による視力の衰えや、反応の低下などに対応した商品は、事故が起きる前の予防商品として、大きな市場に成長しています。また、日本で作られたこれらのユニバーサルデザイン商品は、高齢化を迎えたアジア各国に輸出され活況を呈しています。

## 仙水家の物語

これは2030年の青年世代・熟年世代・老年世代の物語です。

仙水家は福井の都市部で三世代近居で暮らしています。子どもたちはそれぞれ仕事を持ち、父母も仕事と地域活動を両立させています。近くに住む祖父母は高齢ながらも自立した生活を送っています。

### (登場人物)

#### 仙水 翔太 (しょうた)

2009年生まれ／21歳 福井の大学の3回生  
原子力工学を専攻し、福井に研修にきている福育人と交流

#### 仙水 あおい (あおい)

2004年生まれ／26歳 東京の広告会社に勤務  
マーケティングが得意で、福井の眼鏡の世界展開を夢見ている

#### 仙水 さくら (さくら)

2001年生まれ／29歳 福井の原子力関係会社に勤務  
サークルで知り合ったパートナーと結婚予定

#### 仙水 陽子 (ようこ)

1971年生まれ／59歳 翔太たちの母親  
福井駅前商店街でアパレル販売店を経営

#### 仙水 健一 (けんいち)

1969年生まれ／61歳 翔太たちの父親  
複数のベンチャー企業のアドバイザー

#### 仙水 和子 (かずこ)

1945年生まれ／85歳 翔太たちの祖母  
祖父(勇)と総合病院併設の高齢者向けマンションに住む

#### 仙水 勇 (いさむ)

1940年生まれ／90歳 翔太たちの祖父  
10年前に脳梗塞で倒れたが、ロボットスーツの普及で日常生活の不自由はない

※仙水は、福井県の花の「水仙」から名付けました。また、名前は、それぞれの生まれた年別のランキングの上位の名前等に基づき、「ふくい2030年の姿」検討会において作成していますので、実物の人物・団体等とは一切関係ありません。

## 2-4 若者の生活（青年世代：17歳～31歳）

### 第1話 世界に挑戦する若者（教育・ビジネス）

#### ○海外大学との連携、修士修了生の増加

- ・海外大学との遠隔コミュニケーションが実現
- ・大学院は即戦力人材の教育機関として位置づけ

- ◆ 翔太（21歳）は、福井の大学で原子力工学を専攻しています。

大学では、提携しているフランスの大学の講義を大型ディスプレイで受講しています。フランスの学生とも、自動翻訳機を通して自由に議論できるので、世界の先端の原子力技術を互いに学び合うことができます。

大学卒業後は、最新の原子力工学を学ぶため、海外に留学することも考えています。しかし、今通っている大学の大学院では、就職を希望している福井の原子力関連会社の社員が定期的に講師として来校していて、原子力工学に関する知識と、現場で要求される技術を学ぶことができます。そのため、今の大学の大学院を卒業して社会人になってから、海外留学することにしようかとも考えています。

#### ○グローバル市場での挑戦

- ・福井の文化や技術にグローバル市場が注目

- ◆ あおい（26歳）は、東京の広告代理店でマーケティングサービスを担当しています。今は、福井の企業のマーケティング活動の支援をしており、へしこや越前おろしそばなど、健康長寿な福井の食文化を高齢化が進む中国や韓国に紹介しています。

また、大きな市場になっているインドで福井の技術展の開催を計画しています。技術展にあわせ自然豊かで歴史資源もあり、食の豊かな福井県をPRすれば、技術展に来たインド人も、福井に訪れてみたいと考えるだろうと思っています。

## 第2話 社会を担うための準備期間

### ○デジタルネイティブ世代のビジネス

- ・年齢に関わらず社会が求めるスキルを身につける機会が増加
- ・デジタルネイティブ世代の感性が新たな市場を開拓

◆ あおいは、勤務先である広告会社の支援で週1日はキャリアアップのため、マーケティングの専門学校へ通っています。全国の同じ業種の人たちと知り合えて、授業に参加するたびによい刺激をもらえます。

また、以前に、大学の授業で体験したバーチャルカンパニーに関心があり、福井の眼鏡企業と東京のアパレルメーカーのニーズを、インターネット上で結び付けるシステムを構築しているバーチャルカンパニーにメンバーとして参加しました。医療技術の進歩による視力の矯正がごく一般的になった今では、眼鏡は視力の補正のためではなく、主に紫外線カットやファッションの一部として愛用されるようになっており、眼鏡に関する独自の技術を持つ福井の企業のノウハウを生かして、デザインに力を入れた製品を作りたいと思っています。

バーチャルカンパニーのおかげで、世界中から簡単にデザインを集められるようになっていますが、福井在住の気鋭のデザイナー達からも、インターネットを通じてデザインを募集し、「純福井産」といえる高品質な眼鏡を東京で販売したいと思っています。

福井でアパレル販売店を経営している母親（陽子：59歳）にその夢を伝えたところ、夢を応援してくれることになりました。母の店の広告事務を手伝う傍ら、事業ノウハウを伝授してもらい、仕事に活かそうと思っています。

仕入先の眼鏡メーカーを紹介してもらえたことになったので、ディスプレイ会話でサンプルを見せてもらいながら打ち合わせをする予定です。また、最近では、網膜に直接映像を写しこむことができるディスプレイ装置が開発されたことにより、いつでもどこでも映画を楽しめる眼鏡の製造にも力を入れ始めました。この分だと携帯電話機能の付いた眼鏡が開発される日もそう遠くはないかも。伝統の技を継承しつつ、新しい技術も積極的に取り入れる職人さん達と話していると、そんな夢が膨らんできます。

## ○ワークライフバランス

- ・働き方が「量」から「質」へ転換
- ・ワークライフバランスの考えが浸透し、放課後活動や休日活動が活発化

- ◆ あおいの会社は、18時には一斉退社が義務付けられています。仕事の効率化やエネルギーコストが抑えられるメリットがあるのはもちろんですが、何より「職場の外での何気ない会話や出来事の中にこそ、仕事に役立つヒントやチャンスが隠れているものだ。」という社長の方針によるものです。

今日の夜は、北陸新幹線沿線の各地に住む大学の友人たちと、恒例となっている月一度の夕食会です。子どもの頃は、友達が遠くに引っ越すと、もう一生会えないような気持ちになったものですが、高速交通網が整備され、日本中が身近になったおかげで、全国の友人たちとの輪はしっかりつながっています。仕事の話から恋愛の悩みまで、楽しいおしゃべりは尽きません。

そんな中、アパレルメーカーに勤める友人から、体温に反応して変形する発光性のある衣料品用の生地を探していると聞きました。「あれ？そんな会社、福井にもいろいろあったような…」なるほど、社長が言ったとおり、職場の外で仕事の種が見つかりました。明日からまた新たなリサーチの開始です。

## ○結婚、子育ての経済的負担の軽減

- ・現実の生活に即したフレキシブルな男女の役割分担意識が浸透
- ・家族の課題を地域で共有
- ・社会生活と家族生活の両立を支援する制度の確立

- ◆ さくら(29歳)が勤める会社でも、「18時一斉退社」が実施されているため、時間内に集中して勤務する風土ができています。仕事が終わってから、同僚と公共施設の空きスペースで開催されているジムに週2回通い、健康づくりに励んでいます。周りの会社でも社員は、18時に退社しているようで、空きスペースを活用したサークル活動が盛んです。

会社以外のサークルに参加することで、これまでと違った人間関係ができ、新たな刺激を受けることが少なくありません。また、平日でも家族と共に過ごすことが増えて、サークルで出会った結婚予定の大輝も誘い、一緒に食事をしたりもします。



大輝は東京出身ですが、福井の美味しい食事や、人々の優しい気質が気に入り、結婚しても福井に住むことを考えています。結婚してもお互いに仕事を続けるつもりですが、ワークライフバランスの考え方が浸透しているので、結婚後の生活に不安はありません。

共働き世帯が多い福井では、地域で育児・教育を行うシステムがあるので、結婚後の家庭生活も安定しています。近所の夫婦の多くは共働きですが、子どもが子ども園から帰った後も、近所の高齢者が見守る中で、外遊びをしているところに迎えに行く親をよく見かけます。また母親同士のネットワーク「井戸端」もあり、集会所に集まって育児や教育の悩みについて話し合ったり、アドバイスをしたり、子育ての経験者である高齢者なども参加して、みんなで子育てをしています。また、さくらの会社の中にも託児所があり、顔見知りの親たちが交代で面倒を見ているので、働きながらの子育てにも不安はありません。

### ○地域活動の奨励

- ・ 家族や世代を超えた、地域の支え合いの芽生え
- ・ 若者は地域を支えるサポーター

- ◆ 翔太の朝は、ウォーキングがてら近所の一人暮らしの老年の家を訪ね、困ったことがないか確認することから始まります。物事を簡単にこなしてしまうことを「朝飯前」といいますが、そもそもその語源は、江戸時代の人たちが、朝ごはんの前に近所のお年寄りや身体の不自由な人たちの様子を見に回ったことが始まりのようです。「私が若かった頃はそんな習慣はなかったけど、今また江戸時代の習慣が復活するなんて面白いと思わん〜？」と笑っています。

老年の人と話すと、こんな面白い話が聞けたりします。しかも、今日は、好物の福井の郷土料理「たくあんの煮たの」をおすそわけしてもらいました。今朝は美味しい朝ごはんになりそうです。

## 第3話 ふくいでスキルを身に付けた若者「福育人」

### ○アジアの技術者等が日本の最先端技術を習得

- ・ 福井で集中して学べる原子力技術に世界が注目
- ・ 福井で学んだ「福育人」のネットワークが世界に広がる

- ◆ さくらは、様々なタイプの原子力発電所が立地する地元福井で発電所のメンテナンス業務を行う会社に勤めています。アジア地域で需要が高まっている原子力関連技術者を育成するために、会社では海外からの研修生を多く受け入れています。さくらも業務を通じて研修生を指導しています。

先月、中国からやってきた研修生の話では、中国でも原子力発電所の老朽化が始まっていて、福井に発電所のメンテナンスに関する高度な技術があることがうらやましいとのことでした。

福井では原子力産業に関連して、電気を効率的に蓄える電池技術なども多く生まれており、その技術を世界各地で活かすため、関連会社でも海外研修生を多く受け入れています。アジアでは「福育人」と呼ばれる福井で技術を学んだ人が、その国の第一線で活躍しています。さくらは、互いに連絡を取り合っており、技術の向上を図ることが楽しみになっています。

### ○地域と大学の連携

- ・ 若者は地域を支えるサポーター
- ・ 世代を超えた支え合いが、世代間交流を促進

- ◆ 翔太の就職活動中の友人の話では、「ワークシェアリング」や「地域貢献から生まれるやりがい追求」という考えのもと、副業を認めている会社も増えていて、それを受けて短い時間で活動できる地域貢献ビジネスも多く生まれているようです。これまで参加した中では、経験したことがなかった農業体験が新鮮で、高齢者の畑仕事を手伝ったあと、自宅に招かれて一緒に晩御飯を食べたことが思い出となっています。これをきっかけに、昨年集落の祭りにボランティアとして参加しましたが、就職活動が忙しくなって参加できない今年は、後輩たちが祭りの手伝いにいっているようです。

### ○高速交通体系の発達

- ・ 北陸新幹線の開業、高規格道路の開通

- ◆ さくらの会社では、北陸新幹線を使って北陸一円や関西圏から通勤している人もいます。また、さくら自身も休日に東京に住むあおいのところに遊びに行くなど、短時間で都市圏と福井を移動できる高速交通体系のおかげで、ビジネスやレジャーの面で交流が盛んになっています。

都会から近くなった福井の風土に魅せられる人は多く、福井在住を決めた会社の同僚もたくさんいます。妹のあおいの話では、福井のビジネスパートナーが頻繁に東京を訪れるようです。彼女自身も、最近では仕事も兼ねて頻繁に福井に帰ってくるようになりました。

## 第4話 若者文化の発信

### ○福井発のジャパン・クールと東京 Kawaii

- ・若者向けのコミュニティスペースでストリート文化が活発化
- ・福井発の若者文化が全国に発信
- ・まち中の交流スペースで若者が活動

◆ まち中には若者の交流スペースが多く作られています。翔太は、講義終了後や休日には、友人を誘って楽器を演奏したり、ダンスを踊ったりもしています。

休日にはサークル仲間がフリーマーケットを開いて、いらなくなった洋服や生活用品を安値で販売しています。マーケットが評判を呼んで、周辺の大学や高校、一般からの参加者も増え、地産地消屋台も出るなど福井の新しい「コミュニティ市」がつくられて、毎週末が学園祭のようなにぎやかな雰囲気になります。

以前の文化活動は、個々人がインターネットなどを使って自宅で活動することが多く、また、当時は、人が集まる場所といえばショッピングセンターが代表的でしたが、交流スペースができてからは、誰かが何か面白いことをやっているこの場所にみんなが集まるようになりました。

福井の若者文化が凝縮されている交流スペースは、新しい若者文化の発信地として全国的にも注目されていて、福井出身のモデルやDJが活躍しています。さらに、福井発の音楽やファッション、メガネなどが「ジャパńクール」や「東京kawaii」の流れに乗って全世界に発信されています。

## 2-5 父親・母親の生活（熟年世代：47歳～61歳）

### 第1話 知識の活用

#### ○知識・経験を活かして複数のベンチャー企業でアドバイザーとして働く

- ・ワークシェアにより複数の会社に在籍する人が増加

◆ 健一（61歳）は、現在3つの会社のアドバイザーをしています。今日は、午前中に1社、午後は2社に出勤する予定です。近年、複数の会社に勤めることも珍しくなくなってきました。

長年、企業で経理・総務を担当していたので、知り合いから、新しく立ち上げた企業の経理事務等のアドバイスを頼まれました。ワークシェアリングやフレックスタイムの導入で時間に余裕があったため、午前中だけその企業に出勤し、アドバイスをすることにしました。ベンチャー企業は、アイデアはあるのですが、労働力の確保が難しいようです。自分の知識や経験はとても重宝され、若い経営者からも頼りにされていることが仕事のやりがいにつながっています。

それ以来、同じように労働力や経験が乏しい、いくつかのベンチャー企業のアドバイザーとして働くようになっています。

また、先日同じように複数の企業でアドバイザーとして活躍する大学の後輩と会って、話していたことを思い出しました。彼は、「ロストジェネレーション」と呼ばれ、職を転々とした時期があったようですが、今では、いくつかの職場を経験したことで、職場の課題や問題点を的確に見つけることができ、職場にもすぐに慣れることができると言っています。人生に、ムダなことなんてなく、あの時の経験が人として幅を持たせたのだなと感じています。

### 第2話 リスタート

#### ○知識を活用して、関心のある分野での新会社を設立

- ・NHK大河ドラマ「松平春嶽」や「お市と松」が放映
- ・福井市内に歴史散策遊歩道や、足羽川や足羽三山等の自然を楽しむ街中トレッキング遊歩道が整備

- ◆ 5年前にNHK大河ドラマで「松平春嶽」が放映されたことで、福井には多くの観光客が訪れています。また、道路空間の再配分で、自動車と完全分離された遊歩道が作られているので、街中ツーリズムが盛んになり、歩いて気軽に歴史散策を楽しむ光景が見られます。

健一は、あと4年でいわゆる定年の時期を迎えますが、タツネンを経営する誠さん（75歳）から、観光ビジネスに参加しないかと誘われています。街中ツーリズムと郊外のエコグリーンツーリズムを組み合わせた長期滞在型観光により、福井をゆっくり楽しむ人が増えています。

それぞれのツーリズムには、タツネンが派遣するガイドがついていますが、今日の夜は、ガイドのメンバーで集まり、飲みながら福井の観光について話し合う予定です。それぞれ経験の違う者同士なので、自分が思いもしなかった面白いアイデアが出てくるのではないかと期待しています。

### ○駅前空き店舗でのチャレンジ

- ・ 高速交通体系の整備や次世代インターネットの普及により、都市部と地方の情報格差が解消
- ・ 人口減少にともない、空き家や空きスペースが多くなるが、賃貸借の規制が緩和され、安く物件を借りることが可能

- ◆ 陽子（59歳）は、福井駅前商店街でファッションアパレル関係のお店を営んでいる個人事業主です。天気がいいので、自転車専用レーンを通り、今日もお店まで自転車で出勤します。

十数年前から中心市街地では不動産の所有と利用の分離が進み、意欲のある人には空き店舗が簡単に借りられるようになりました。もともと地元繊維メーカーで営業を担当していましたが、アパレル販売に関心を持つようになっていたので、思いきって会社をやめ、福井駅前商店街に店舗を借りています。

今日は、あおい（26歳）から紹介された、京都のデザイナーとディスプレイ会議で、新しいデザインを考えています。作る服は、福井で作られた機能性の高い素材と、京都の伝統を感じさせるデザインで、インターネット等を通じて、世界各地から注文が入ってきます。

若手のデザイナーとも協働で仕事をするので、今でも若さと美貌を保っていて、さくら（29歳）たちにとってもちょっとした憧れになっています。父は、そんな母にちょっとやきもちを焼いているようですが。

### 第3話 達年世代が運営するNPO等に参加

#### ○地域の公共空間（公園・道路・用水路等）をアダプト制度で管理し、緑の空間を創出

- ・アダプト制度によって住民による地域の緑化が進み、市街地は緑あふれる街並みに変化
- ・マンションにも地域の集会所のようなコミュニティルームを設置

◆ 今日は休日です。健一は、マンションのコミュニティルームで同じマンションに住む達年の人たちとお茶を飲みながら、午後に行うNPO活動の打ち合わせをしました。

昔から環境問題に関心がありましたが、具体的に活動する機会が見つけれずいました。しかし、数年前、コミュニティルームで世間話をしているときに、同じマンションに住む達年の人たちが、アダプト制度によって地域の緑化・美化活動を行うNPOを運営していることを知り、参加させてもらうことにしました。

「アダプト」は英語で「養子縁組をする」といった意味合いがあり、アダプト制度とは、公園・道路・用水路などの公共財を住民自らが管理し、緑化や美化活動を行う制度で、福井では20年ほど前に全国に先駆けて広がりました。今では公園や道路などには緑があふれていて、その美しい街並みは全国からも注目されているようです。

今日は、マンションの周りの路側緩衝帯の清掃をすることになっています。路側緩衝帯には、樹木だけでなく様々な植物が植えられていて、緑豊かな前庭として整備されています。ここは、市内でも魅力的な路側緩衝帯として有名で、街中トレッキングのコースとして人気があります。

NPOで活動する達年の方達は本当に生き生きと楽しそうで、もうじき65歳の定年を迎える自分も、あんなふうに心身ともに健康を保って活躍していきたいと思っています。

## 第4話 健康いきいき家族

## ○家族の健康状態がリアルタイムで医療機関と家族に情報提供される健康診断システムが確立

- ・マイクロチップによる簡易健診が可能になり、その結果が家族にも即時送信
- ・ロボットスーツなどにより介護の負担が大幅に減少

◆ 健一は、朝、目が覚めると、まず携帯を見るのが日課になっています。体に装着されたマイクロチップによる健康診断結果をチェックするためです。今日も異状なし。これを見ると一日の元気が出てきます。一緒に暮らす陽子、さくら、翔太（21歳）の診断結果も良好なようで、「おはよう、今日も健康やね。」が朝のあいさつになっています。

ただ、近くに住む父親の勇（90歳）の血圧が少し高いようです。送られてきた診断結果は問題ないとのことでしたが、心配だったので仕事の合間に職場から連絡してみました。ディスプレイに現れた父親は顔色もよく、元気そうな顔を見られて一安心です。父親には心配しすぎだと笑われましたが、10年前に脳梗塞で倒れ、半身不随になった父親の健康状態には、どうしても敏感になってしまいます。父親は一時期寝たきりの状態でしたが、今ではロボットスーツを装着すれば身の回りのことができるまで回復しています。

勇が寝たきりになったとき、健一と陽子は1日中付きっきりで世話をする母親の和子（85歳）を助けるため、就業後や休日に交代で父親の介護にあたりました。子どもたちもまだ学生で手がかかり、介護と子育てで毎日が大変でした。しかし、ちょうどその頃に実用化が始まったロボットスーツのおかげで、父親がなんとか自力で動けるようになると、介護がとても楽になったことを思い出します。

## 2-6 祖父母の生活（老年世代：77～86歳以上）

### 第1話 みんなに見守られた安心生活

#### ○医療機関とつながる住環境とこころで感じる安心生活

- ・高齢者向けの移医食楽住が一体となったまちづくりが実現
- ・医療通信ネットワークが進化し、「家庭内健康診断」、「自宅診察」が実現

- ◆ ここは、市街地の中心部に位置する総合病院併設の高齢者向けマンション。  
勇（90歳）と和子（85歳）がいつものように目を覚ますと、病院低層棟の屋上緑地から野鳥のさえずりが聞こえてきました。今日もいいお天気のように。  
寝室のカーテンを開けた和子は、ベッド脇のモニタースイッチをオンにします。このコンピュータには二人の健康状態に関する様々なデータがインプットされていて、その日の健康状態を教えてくれます。データは毎日、かかりつけ医師と別居している息子の健一（61歳）の携帯電話に送られ、体調が悪い時には、モニターを通して自宅で医師の診察を受けることもできます。近年は遺伝子診断も発達しているので、ほんの少しの兆候で病気の早期発見が可能になっており、二人は安心して毎日を過ごしています。

#### ○達年が活躍する地域介護

- ・食事は栄養士の管理、食材は地産地消が実現
- ・達年世代による地域介護システムの充実

- ◆ 健康チェックが終わったら、一日の食事の注文です。モニターからタッチパネルで選べます。モニターに表示されているのは、病院の管理栄養士が作成した10種類近くのメニュー。カロリーや栄養バランス以外に食材の産地や生産者の情報も見ることができ、選択した食事の食材が、朝・昼・夜、決まった時間に、近くのサービスセンターから必要な量だけ届きます。調理済みの温かいものも選ぶことができるのですが、マンションにはキッチンもあり、和子は料理が好きなので、体調が悪い時など以外は、食材を注文しています。

「おはようございます！」玄関のインターホンから、配食サービスさんの明るい声が聞こえてきました。朝食が届いたようです。この配食サービスは定年退職した達年世代が運営しており、二人はこの地区を担当している方たちとすっかり



顔なじみになっています。

「いつもありがとう。」食事を受け取ってから、時々ふと考えます。「若い頃は、商店街の八百屋さんや魚屋さんなどと世間話をしたものだ。形は変わったけれど、こういうつながりは本当によいものねえ。」

午後になると、勇のもとに介護ヘルパーの山田さんがやってきました。今日は、ボランティアの鈴木さんも一緒です。山田さんは、いつも手際よく入浴やリハビリを介助してくれます。電器メーカーを退職し、地域のために貢献したいと介護ボランティアに参加している町内の鈴木さんともすっかり打ち解けていて、リハビリの間いろんな話に花が咲きます。息子夫婦や孫たちと近いけれども、離れて暮らしている勇にとって、何かあるとすぐに相談ができる地域介護のボランティアメンバーは、かけがえのない存在となっています。

### ○家族をつなげるディスプレイ会話

- ・ 3D立体映像によるディスプレイ会話ができる電話が普及
- ・ ライフステージに応じて住み替える「ライフステージホーム」が普及

- ◆ 山田さんたちが帰ってしばらくすると、電話がかかってきました。今朝の健康診断のデータを見た健一が、勇の血圧がいつもより高いのを心配して職場からかけてきたのです。3D立体画像で現れた健一は、話していると、まるで本当に近くにいるかのよう。休日には、東京にいるあおい（26歳）ともよく立体画像を使って近況報告をしあっています。

近くに住んではいても父親の元気そうな顔を見て、健一もほっとした様子。33歳で子どもが生まれた時に郊外で購入したマイホームを離れてこのマンションに移り住む時は迷いもあったのですが、離れていてもこうしてみんなに見守られていることを時々深く実感します。

## 第2話 安全な移動

### ○高齢者向けの低速型車両（ゴールデンビークル）が普及

- ・ 小型電動の低速型車両（ゴールデンビークル）が普及、道路空間の再配分により専用レーンも設置され、高齢者も安心して移動できる新しい車社会を実現
- ・ デマンド式のコミュニティ交通も普及し、交通弱者の移動手段を確保

- ◆ 午後、介護ヘルパーさんがやってきたので、和子はお隣の高橋さんと一緒に近くの小学校にある福縁サロンへ出かけることにしました。

高橋さんは最近、大阪からご主人と引っ越してきたばかり。ご主人は釣りが趣味で、新幹線で便利になった福井へよく釣りに来ており、福井の自然の美しさと、釣りで知り合った勇から聞くQOCの高さに惹かれて、子どもたちの独立を機に福井に移住してきました。奥さんも、慣れない土地での生活に最初は不安があったようですが、和子に誘われて福縁サロンに出かけるようになってからというもの、すっかりその不安はなくなった様子です。

二人はさっそく、マンション住人で共同所有しているゴールデンビークルに乗って出発。ゴールデンビークルは普通自動車の半分ほどの大きさの小型電動の低速型車両で、高齢者も安全に運転できる設計になっています。道路に出ても、普通自動車とは別に専用のスロードライブレーンが設けられているので、とっても安心。街路樹の緑や路側帯の花壇の色鮮やかな花々を楽しみながら、ゆっくりと運転することができます。また、共同所有なので維持費も安くすみます。

小学校に到着すると、ちょうど校門の前に止まったバスから、友人の大野さんが降りてくるところが見えました。最近は大規模な「コミュニティ交通」が発達し、大変便利になっているので、福縁サロンにやってくる人の半数以上は公共交通を利用しています。

ゴールデンビークルを駐車場に停め、二人は校舎の中へ。空き教室を活用した福縁サロンは毎日開かれており、地域の様々な人が集っています。世間話をしたり、趣味の仲間と作品づくりをしたりしてすごしていると「おばあちゃん、遊ぼう！」今日も学校をおえた子どもたちの元気な声が聞こえてきました。みんなの「おばあちゃん」として地域の子どもたちとふれ合えることが、なによりの楽しみになっています。